

ヨハネス・ブラームス 他の作曲家による編曲作品について

久保田 葉子

Brahms-Arrangements by other composers - Fremde Bearbeitungen der Klavierwerke von Johannes Brahms -

KUBOTA Yoko

Abstract

Johannes Brahms (1833-1897) arranged most of his orchestral- and chamber music for piano duo. Many contemporaries of Brahms also arranged his works in various instrumental combination. The common practice in 19th century realized, that more people would have opportunity to play and know his music. In this report, I study arrangements not by Brahms, about arrangers who worked with piano music of Brahms, and how the publishers dealt with works of Brahms.

Key Word: Brahms, arrangement, piano, publisher, arranger

[要約]

Johannes Brahms (1833-1897) は自作の交響曲、ピアノ協奏曲、声楽を含むオーケストラ作品、セレナーデ、序曲、ほとんどの室内楽作品をピアノ・デュオの編成にアレンジして残している。また、同時代の他の作曲家も次々とブラームスの作品を編曲し、彼の作品は当時、様々な編成で世に広まっていった。ここでは19世紀の編曲のあり方、作曲家と出版社の関係、ブラームスの作品がどのように市民に享受されたかを考えたい。

キーワード：ブラームス、編曲、ピアノ、出版社、編曲者

はじめに

古典、ロマン派の多くの作曲家が自分の作品を他の楽器のために編曲している。それは当時よく行われることであった。そうすることで作品を広める目的があり、作曲家、出版社は利益を得ることが出来た。作曲家本人が編曲しなかった場合、出版社は他の作曲家または演奏者に編曲を依頼した¹⁾。

ブラームスは彼の作品の多くを1台4手、2台4手のために編曲している。彼はそれらの編

曲が自分の名前で公表されないようにと主張し、後の研究によってブラームス本人の編曲であることが確認されたものもあれば、出版社が彼の意向を無視してブラームスの名前で出版したものもある。

ブラームス自身がピアニストであったため彼の編曲は実演にふさわしくなされている。ブラームス自身による編曲については既に取り上げているので²⁾、ここでは他の作曲家によるブラームスのピアノ作品の編曲について資料で明らかになっているものを元に考察したい。

ブラームスはオリジナルが世に広まる前に自分の多くの作品が他の作曲家・演奏者によって編曲・公表されていると出版社ジムロックをしばしば批判している。それらの編曲の質についてもブラームスが満足していないこともよくあった³⁾。特にジムロック社の編集者ローベルト・ケラーの編曲をブラームスは厳しく評価していたようだ。逆にフリードリッヒ・ヘルマン、パウル・クレンゲル、テオドア・キルヒナーの編曲は高く評価していたという。これらの編曲者について調べるうち、多くの人物については各国の辞典などにも登場せず、情報が残されていないことが分かった。楽譜については出版記録があるものの現在は手に入らないことが多く、また目的に応じて次々と新しい編成で今日でも編曲がなされていることから楽譜の比較に関しては一般の図書館などで手にすることの出来る、出版されたものに限られてしまうが、ブラームスのピアノ作品の、他の作曲家による編曲の全体像を探ってみたい。

1. 編曲が生まれた背景

交響曲のような大きな編成の作品は今日のように簡単にどこでも演奏の機会を得たわけではなかった。飛行機等の交通手段が発達し、録音技術が向上したこともあり、現代の私たちは世界中のオーケストラの演奏を享受し、新しい作品のスコアもすぐに見ることができる。しかし条件の全く違うブラームスの時代には大きな編成の作品を広めるには家庭で演奏できる形で作品を紹介する必要があった。そのためブラームスは彼の交響曲、ピアノ協奏曲、声楽を含むオーケストラ作品、セレナーデ、序曲、ほとんどの室内楽作品をピアノ・デュオの編成にアレンジして残している。

弦楽器の音色をピアノに移すことは難しいが、卓越したピアニストであったことが伝えられ、自身のピアノ曲・室内楽曲を好んで演奏し、クララ・シューマンやヨアヒムとも共演していたブラームスはピアノの特性を知り尽くしているため、二つのピアノのパートに効果的に音が振り分けられ、どんなに音が積み重なっても響きのクリアーさが保たれている。自作のオーケストラ/室内楽作品をこのようにピアノ譜の形で残した作曲家は珍しく、ピアノ表現の可能性を考える時、ブラームスの例は大変興味深い。ブラームス自身の編曲は既にナクソスより大変すばらしい録音がリリースされ、作品の本質が失われることなく2台4手、あるいは1台4手のピアノで表現される様子を聴くことができる⁴⁾。

2. ブラームス以外による編曲

ブラームス自身がピアノへの編曲を行わなかった場合、あるいはブラームス自身の編曲で作品が既に有名になってから、様々な編成で演奏するために、何人もの作曲家・演奏者によ

ってブラームスの作品の編曲が行われた。これはブラームス作品の人気と、楽譜が確実に売れたことの表れでもあるのだが、ブラームスはオリジナルが十分に世に広まる前に自分の多くの作品が他の作曲家・演奏者によって編曲・公表されていることを快く思わず、出版社ジムロックをしばしば批判している。またブラームスから見ると高い料金設定、ふさわしいとは必ずしも言えない編成へのアレンジ、歌曲が外国語（主に英語）のテキストで広まることに対しても不満を感じていた⁵⁾。

編曲の質についてブラームスは友人や同僚の中でもゲヴァントハウス・オーケストラのメンバーでヴァイオリン教師のフリードリッヒ・ヘルマンや、ライプツィヒ・コンセルヴァトリウムの教師・合唱指揮者のパウル・クレンゲルの仕事ぶりは公に認め、友人であり作曲家のテオドア・キルヒナーの編曲をブラームスは特に高く評価していたという。しかし、ジムロックの編集者でブラームスの原稿チェックなどを身近に行っていたローベルト・ケラーの編曲についてブラームスは出版社のジムロックに宛てた手紙の中で「ケラーは優秀な人物で、全て勤勉にきちんと行うので誰も文句のつけようがない。しかし、彼の2手用のアレンジはPhilister【筆者注「フィリスター的趣味」とは、無教養で小市民的、実利主義的で凡俗な趣味であるの意⁶⁾】を表していて才気に満ちた奏者には面白くないのではないかとあなたに申し上げておかねばなりません」と強い言葉で批判している⁷⁾。

2. 1.

どれだけ多くの種類の編曲がブラームス以外の編曲者によってなされたかを俯瞰するため、ブラームスのピアノ作品を全て挙げ、それぞれどんな編曲があるかを一覧にする⁸⁾。(編曲者：編成 *印は楽譜についてのコメント)

ピアノ協奏曲

第1番 二短調 作品15

-キルヒナー編曲：ピアノ2台8手

第2番 変ロ長調 作品83

-ケラー編曲：ピアノ1台4手

ピアノを含む室内楽

ピアノ五重奏曲 ヘ短調 作品34

-キルヒナー編曲：ピアノ1台4手

-ヘルマン編曲：ヴァイオリン、チェロ、ピアノ1台4手

ピアノ四重奏曲

第1番 ト短調 作品25

-ヘルマン編曲：ヴァイオリン、チェロ、ピアノ1台4手

-J.クレンゲル編曲：ピアノ2台4手

-A.シェーンベルク編曲：オーケストラ版

*第1～第3楽章には室内楽的な響きがあるが、第4楽章はグロッケンシュピール、シロフォン、バズドラム、スネアといった打楽器類が大胆に加えられ、金管楽器にはフラッター・タンギング奏法、弦楽器にはコル・レーニョ奏法を用いている。ブラームスの響きとは違う印象。スコアには細かく記号で“Hauptstimme（主旋律）”が示されている。

第2番 イ長調 作品26

-ヘルマン編曲：ヴァイオリン、チェロ、ピアノ1台4手

-J.クレンゲル編曲：ピアノ2台4手

第3番 八短調 作品60

-ヘルマン編曲：ヴァイオリン、チェロ、ピアノ1台4手

-ケラー編曲：ピアノ1台4手

-P.クレンゲル編曲：ピアノ2台4手

ピアノトリオ

第1番 口長調 作品8（第1版、第2版）

-ヘルマン編曲：ピアノ1台4手（第1版より編曲）

-ケラー編曲：ピアノ1台4手（第2版より編曲）

第2番 八長調 作品87

-ケラー編曲：ピアノ1台4手

第3番 八短調 作品101

-ケラー編曲：ピアノ1台4手

-レマーレ編曲：オルガン（第3楽章のみ）

ピアノ、ヴァイオリン、ホルン（またはチェロかヴィオラ）のためのトリオ

変ホ長調 作品40

-ケラー編曲：ピアノ1台4手

ピアノ、クラリネット（またはヴィオラ）、チェロのためのトリオ イ短調 作品114

-P.クレンゲル編曲：ピアノ1台4手

ヴァイオリン・ソナタ

第1番 ト長調 作品78

-ケラー編曲：ピアノ1台4手

-P.クレンゲル編曲：ピアノとチェロ

-ラインハルト編曲：ハルモニウムとピアノ（2楽章のみ）

第2番 イ長調 作品100

-ケラー編曲：ピアノ1台4手

-ラインハルト編曲：ハルモニウムとピアノ（1楽章のみ）

第3番 二短調 作品108

-ケラー編曲：ピアノ1台4手

-レマーレ編曲：オルガン（第2楽章のみ）

ピアノとヴァイオリンのためのスケルツォ（「F.A.Eソナタ」の第3楽章）WoO2

チェロ・ソナタ

第1番 ホ短調 作品38

-ケラー編曲：ピアノ1台4手

第2番 ヘ長調 作品99

-ケラー編曲：ピアノ1台4手

クラリネット（またはヴィオラ）・ソナタ

第1番 ヘ短調 作品120-1

-P.クレンゲル編曲：ピアノ1台4手

-ベリオ編曲：クラリネット（あるいはヴィオラ）とオーケストラ

*第1楽章1～14小節、第2楽章1～5小節はベリオが付け足したものの。

第2番 変ホ長調 作品120-2

-P.クレンゲル編曲：ピアノ1台4手

ピアノ作品

1. 2台4手

ソナタ ヘ短調 作品34 bis

（ピアノ五重奏曲 ヘ短調 作品34参照）

ハイドンの主題による変奏曲 変ロ長調 作品56b

-ケラー編曲：ピアノ1台4手

*オクターブの追加が多い。中音域が重なるため特にプリモの高音域がさらに高め。

-P.クレンゲル編曲：ピアノ2台8手

-シュタルク編曲：ピアノ1台2手

*オリジナルの2台ピアノ版の音をなるべく多く拾っている。10度の音程、手の交差が度々ある。響きの厚みが不足しない工夫がなされている。

2. 1台4手

R.シューマンの主題による変奏曲 変ホ長調 作品23

-キルヒナー編曲：ピアノ1台2手

-キルヒナー編曲：ピアノ2台4手

ワルツ集 作品39

-ヘルマン編曲：ヴァイオリンとピアノ1台4手

-ヘルマン編曲：ヴァイオリン、チェロ、ピアノ1台4手

-エッシュマン編曲：ピアノ1台4手（やさしい編曲）

-ティーリオット編曲：弦楽四重奏（コントラバスは随意）

ワルツ集「愛の歌」作品52a

- ヘルマン編曲：ヴァイオリン、チェロ、ピアノ1台4手
- ヘルマン編曲：ヴァイオリンとピアノ1台2手
- ヘルマン編曲：フルートとピアノ1台2手
- ヘルマン編曲：ピアノ、フルート、ヴァイオリン（あるいはフルート2本）
- ヘルマン編曲：2つのヴァイオリン
- ヘルマン編曲：弦楽五重奏あるいは弦楽オーケストラ
- ケラー編曲：ピアノ1台6手
- キルヒナー編曲：ピアノ1台2手

ワルツ集「新・愛の歌」作品65a

- キルヒナー編曲：ピアノ1台2手

ハンガリー舞曲集 第1～21番 Wo01

- キルヒナー編曲：ピアノ1台2手（第11-21番のみ）
- ケラー編曲：ピアノ1台4手（やさしい編曲）
- ケラー編曲：ピアノ1台2手（やさしい編曲）
- ケラー編曲：ピアノ1台6手
- ケラー編曲：ピアノ2台4手
- ケラー編曲：ピアノ2台8手
- ヘルマン編曲：ヴァイオリンとピアノ1台2手（やさしい編曲）
- ヘルマン編曲：フルートとピアノ1台2手
- ヘルマン編曲：ピアノ、フルート、ヴァイオリン（あるいはフルート2本）
- ヘルマン編曲：ピアノ、ヴァイオリン、チェロ
- ヘルマン編曲：ヴァイオリン、チェロ、ピアノ1台4手
- ヘルマン編曲：2つのヴァイオリン
- ヨアヒム編曲：ヴァイオリンとピアノ1台2手
- * ヴァイオリンが響きやすい調への移調はあるが、アーティキュレーションはオリジナルに忠実。演奏効果も良く考えられた編曲。
- P.クレンゲル編曲：ヴァイオリンとピアノ1台2手（あるいはフルート）
（第1-3, 5-8, 13, 17, 19-21番のみ）
- * ヨアヒムの編曲と比べると音域が狭く重音が少ない。ややお行儀の良い印象。
- レマーレ編曲：オルガン（第1番, 第5番のみ）
- ハレン編曲：オーケストラ（第2番, 第7番のみ）
- パルロウ編曲：オーケストラ（第5, 6番, 第11-16番のみ）
- ドヴォルザーク編曲：オーケストラ（第17-21番のみ）
- ピアッティ編曲：チェロとピアノ1台2手
- * 重音を減らし弾きやすくしてある。
- ヴィアルド編曲：ヴォーカル・デュエットとピアノ伴奏（第6番, 第5番のみ）

3. 1台2手

ピアノ・ソナタ

第1番 八長調 作品1

-P.クレンゲル編曲：ピアノ1台4手

第2番 嬰へ短調 作品2

-P.クレンゲル編曲：ピアノ1台4手

第3番 へ短調 作品5

-クラインミヒェル編曲：ピアノ1台4手

スケルツォ 変ホ短調 作品4

-ヘルマン編曲：ピアノ1台4手

変奏曲

R.シューマンの主題による変奏曲 嬰へ短調 作品9

創作主題による変奏曲 二長調 作品21-1

-ケラー編曲：ピアノ1台4手

ハンガリーの主題による変奏曲 二長調 作品21-2

-ケラー編曲：ピアノ1台4手

ヘンデルの主題による変奏曲 変口長調 作品24

-キルヒナー編曲：ピアノ1台4手

バガニーニの主題による変奏曲 イ短調 作品35

4つのバラード 作品10

-ヘルマン編曲：ピアノ1台4手

ワルツ集 作品39

(上記1台4手の欄参照)

8つの小品 作品76

2つの狂詩曲 作品79

7つの幻想曲 作品116

-P.クレンゲル編曲：ピアノ1台4手

-P.クレンゲル編曲：ヴァイオリンとピアノ1台2手(第4曲のみ)

-P.クレンゲル編曲：チェロとピアノ1台2手(第4曲のみ)

-P.クレンゲル編曲：ヴィオラ(あるいはクラリネット)とピアノ1台2手(第4曲のみ)

-P.クレンゲル編曲：オーケストラ(第4曲のみ)

-レマーレ編曲：オルガン(第4曲,第6曲のみ)

3つの間奏曲 作品117

-P.クレンゲル編曲：ピアノ1台4手

-P.クレンゲル編曲：ヴァイオリンとピアノ1台2手(第1曲のみ)

-P.クレンゲル編曲：ヴィオラとピアノ1台2手(第1曲のみ)

-P.クレンゲル編曲：チェロとピアノ1台2手（第1曲のみ）

-P.クレンゲル編曲：オーケストラ（第1曲のみ）

-レマーレ編曲：オルガン（第1曲のみ）

6つの小品 作品118

-バルト編曲：ヴァイオリンとピアノ1台2手（第2曲のみ）

4つの小品 作品119

ハンガリー舞曲集 第1～10番 WoO1

（上記1台4手の欄参照）

51の練習曲 WoO6

2つのガヴオット WoO3

2つのジーク WoO4

2つのサラバンド WoO5

他の作曲家によるピアノ協奏曲のためのカデンツ（5曲）

J.S.バッハのチェンバロ協奏曲 BWV1052 第3楽章 WoO11

ベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番 作品58 第1、第3楽章 WoO12

W.A.モーツァルトのピアノ協奏曲 KV453 第1、第2楽章 WoO13

W.A.モーツァルトのピアノ協奏曲 KV466 第1楽章 WoO14

W.A.モーツァルトのピアノ協奏曲 KV491 第1楽章 WoO15

2.2. 編曲者について⁹⁾

-Barth, Richard リヒャルト・バルト/ドイツ

（1850年ザクセンのグロースヴァンツレーベン生、1923年マールブルク没。ヴァイオリニスト、指揮者、教育者、作曲家。J.ヨアヒムに師事。「J.ブラームス J.O.グリムとの文通」を出版。作品には3つのヴァイオリン・ソナタ、ピアノ・トリオ、弦楽四重奏曲、ヴァイオリン・ソロのためのパルティータとシャコンヌがある。）

-Berio, Luciano ルチアーノ・ベリオ/イタリア

（1925年オネリア生、2003年ローマ没。作曲家。ミラノ音楽院で学んだ後アメリカに渡りダラピッコラに師事。ミラノのイタリア国立放送局電子音楽スタジオ設立に携わり、世界有数のスタジオに育て上げた。各楽器の可能性を追求した「セクエンツァ」シリーズ、声と電子音の「ジョイス賛」、演奏しながら録音しそれをさらに演奏に被せる「ディフェレンシズ」等多様な作品がある。自作品の改作、ブラームスらの作品の編曲も行う。）

-Dvořák, Antonín アントニーン・ドヴォルザーク/チェコ

（1841年ネラホゼヴェス生、1904年プラハ没。作曲家。1874-78年、オーストリア政府の奨学金を受ける。審査員の中にいたブラームスは作品を高く評価。出版社ジムロックに紹介して出版の機会を後押しした。作品にはスラヴの題材や民族舞曲の要素が取り入れられチェコ国民楽派最大の作曲家。）

- Eschmann, Johann Karl ヨハン・カール・エッシュマン/スイス
 (1826年ヴィンタートゥール生、1882年チューリッヒ没。ピアニスト、教育者。ライプツィヒでモシュレスに師事。メンデルスゾーンからもレッスンを受ける。ピアノ教師としてチューリッヒで活躍。著書に「ピアノ作品のガイドブック」「ピアノ・レッスンからの100の箴言」がある。)
- Hallén, Johan Andreas ヨハン・アンドレアス・ハレン/スウェーデン
 (1846年エーテボリ生、1925年ストックホルム没。指揮者、作曲家。ライプツィヒでライネッケに、ミュンヘンでラインベルガーに、ドレスデンでリーツに師事。その後スウェーデンで指揮活動を行う。作品にオペラ、声楽を含むオーケストラ作品、「天空の響き」などがあり、批評家としても著書を残している。)
- Hermann, Friedrich フリードリッヒ・ヘルマン/ドイツ
 (1828年フランクフルト生、1907年ライプツィヒ没。ヴァイオリニスト、教育者、作曲家。1846-78年ゲヴァントハウス・オーケストラ奏者。ライプツィヒのコンセルヴァトリウムで教育にあたる。彼のヴァイオリン・メソッドは当時非常に有名だった。ブラームス、シューマンの作品を弦楽アンサンブル用に編曲。)
- Joachim, Joseph ヨーゼフ・ヨアヒム/ドイツ
 (1831年プレスブルク近郊キットゼー生、1907年ベルリン没。ヴァイオリニスト、指揮者、作曲家。19世紀後半のドイツ最大のヴァイオリニスト。弦楽四重奏の分野でも活躍。作品に3曲のヴァイオリン協奏曲、ヴァイオリンとオーケストラのための変奏曲や小品多数。ヴァイオリン協奏曲のカデンツやブラームス、シューマン、ディートリッヒとの「F.A.E. ソナタ」も知られている。)
- Keller, Robert ローベルト・ケラー/ドイツ
 (1891年没。ジムロック社の原稿審査係・編集者であること以外は不詳。)
- Kirchner, Theodor テオドア・キルヒナー/ドイツ
 (1823年ケムニッツ近郊ノイキルヒェン生、1903年ハンプルク没。ピアニスト、オルガニスト、指揮者、教育者、作曲家。シューマンやメンデルスゾーンの伝統の上に独自の形式・響きを追究した叙情的なピアノ曲や歌曲で知られた。ブラームスやイェンゼンの歌曲を多数ピアノ・ソロに編曲。)
- Kleinmichel, Richard リヒャルト・クラインミヒェル/ドイツ
 (1846年ポーゼン生、1901年ベルリン近郊シャルロッテンブルク没。ピアニスト、作曲家。作品にピアノのための練習曲、スペイン民謡、イタリア民謡、歌曲、室内楽、2つの交響曲、2つのオペラがあるが、ワーグナー作品の簡易なピアノ・リダクション版で知られている。)
- Klengel, Julius ユリウス・クレンゲル/ドイツ
 (1859年ライプツィヒ生、1933年同地没。当時最もよく知られたヴィルトゥオーゾ・チェリスト。1881-1924年、ゲヴァントハウス・オーケストラのソロ・チェロ奏者。ライプツィヒのコンセルヴァトリウム教授。4つのチェロ協奏曲、ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲、12本のチェロのための賛歌、チェロ・ソナタ、組曲などチェロのための作品

を多数作曲。)

-Klengel, Paul パウル・クレンゲル/ドイツ

(1854年ライプツィヒ生、1935年同地没。ヴァイオリニスト、ピアニスト、作曲家。ユリウス・クレンゲルの兄。合唱指揮者としても活動。「音楽美学について」の論文で博士号取得。多くの歌曲や、ヴァイオリンとピアノのための作品を作曲。様々な楽器の組み合わせによる巧みな編曲を出版。)

-Lemare, Edwin Henry エドウィン・ヘンリー・レマーレ/イギリス

(1866年ウェイト島ヴェントノア生、1934年ハリウッド没。オルガニスト、作曲家。数多くのリサイタルに出演。ワーグナー作品を好んでオルガンのために編曲し、作品にもその影響が見られる。2つのオルガン交響曲、コンサート・トッカータ、オルガンのための小品と数百曲の編曲を残す。)

-Parlow, Albert アルベルト・パルロウ/ドイツ

(1824年生、1888年没。1852年にドイツ海軍初の音楽隊をシュテッティンで結成。1864年、リオンの軍楽隊音楽コンクール1位受賞。歩兵連隊長としてバーデンバーデンに滞在中ブラームスへの関心を持ち、ハンガリー舞曲(抜粋)の編曲を依頼された。オーケストラの楽器の都合で第6曲は半音高い二長調となっている。)

-Piatti, Alfredo アルフレード・ピアッティ/イタリア

(1822年ボルゴカナーレ生、1901年ベルガモ近郊モッツォ没。チェリスト、作曲家。1834年にミラノでデビュー、1843年にミュンヘンでリストと共演。1859-98年、パリの土曜/月曜コンサート・シリーズのメイン奏者。作品に2つのチェロ協奏曲、6つのチェロ・ソナタ、チェロ伴奏による歌曲などがある。)

-Reinhard, August アウグスト・ラインハルト/ドイツ

(1831年バレンシュテット生、1912年同地没。作曲家、ハルモニウム奏者。アンハルト=ベルンブルク公爵の宮廷でコンサート、オペラ上演に従事。ヴィトゲンシュタイン皇太子とドレスデンに旅行し初めてカウフマン社のハルモニウムと出会う。この楽器にオルガンともピアノとも違う表現力、可能性を見出し演奏・指導・教材の出版を行うが楽器の衰退とともに忘れ去られていく。)

-Schönberg, Arnold アルノルト・シェーンベルク/オーストリア アメリカ

(1874年ウィーン生、1951年ロサンゼルス没。作曲家。無調の音楽、十二音技法の創始によって現代音楽の進路に決定的な方向を示す。弟子にウェーベルン、ベルクらがいる。ナチスが政権を取るとユダヤ人である彼は亡命を決意し、ボストン、カルフォルニアで教育にあたった。晩年には「和声の構造的機能」等の和声理論書を出版。)

-Stark, Ludwig ルートヴィヒ・シュターク/ドイツ

(1831年ミュンヘン生、1884年シュトゥットガルト没。教育者。哲学と作曲を専攻。シュトゥットガルト・コンセルヴァトリウムを設立し、声楽・和声学・スコアリーディング・音楽史を教える。ケルト民族の音楽、編曲アルバムや教材、器楽、ピアノ作品、歌曲、合唱曲を出版。)

- Thieriot, Ferdinand フェルディナンド・ティーリオット/ドイツ
(1838年生、1919年没。チェリスト、指揮者、作曲家。マルクスゼン門下でブラームスの兄弟弟子。)
- Viardot-García, Pauline ポリーヌ・ヴィアルド=ガルシア/フランス
(1821年生、1910年パリ没。メゾ・ソプラノ歌手、作曲家。1836年にブリュッセルでステージに立ち、それ以来ドイツ、フランスに演奏旅行。39年にはロンドンでオペラ・デビューし各地の劇場で活躍。後にバーデンバーデンに移住。ブラームスの「アルト・ラプソディー」を初演。歌曲、オペレッタを作曲し、ショパンらの作品を声楽曲に編曲。)

むすび

作品を演奏・享受するには家庭にあるピアノでオリジナルの響きや作品の構成を味わうのがいちばん現実的であったブラームスの頃の時代的背景、またハルモニウムや管楽器でもブラームスの作品を演奏したいという当時の人々の強い思いが研究を通して伝わってきた。驚くほど多数の編曲作品・編曲者の存在から、ブラームスの作品が広く愛され、出版社や編曲者に大きな経済的成功をもたらしたことも分かった。

現在も演奏の現場の制約や、オリジナルでなくても良い作品なら自ら演奏したいという意欲からアレンジの習慣・需要は大いにある。ブラームスの編曲作品は色々な編成で、各地域で増え続けることだろう。上記編曲一覧に載せなかったものでは、フリッツ・クライスラー(ヴァイオリン)やモリス・ジャンドラ(チェロ)といった演奏家がアンコール・ピースのような形で「ハンガリー舞曲」の中の1曲をボーイングや自由な解釈を書き加えながら出版しているもの、ファゴット奏者が仲間と演奏するために木管アンサンブルのために編曲したと思われる編曲、さらには作品への敬意が欠けていると言わざるを得ないオリジナルからかけ離れた編曲にも出会った。

ブラームスと同時代に生きた(ブラームスが彼らの編曲を知っていた可能性が高い)編曲者たちの仕事が楽譜の状態で今日の私たちの手に取られることがそれほど多くはなく、あるいは既に消失している現実からは、作品のオリジナリティ、さらには長く生き続け残る作品とは何かという問題についても考えさせられた。ブラームスのピアノ作品に改めて愛情と敬意を持って接していきたい。

参考文献

- 1) McCorkle, Donald M., Thematic Catalog of the Works of Johannes Brahms [Thematisches Verzeichnis sämtlicher im Druck erschienenen Werke von Johannes Brahms], Da Capo Press New York, XXX, 1973
- 2) 久保田葉子、「ヨハネス・ブラームスのピアノ編曲作品について」、『平成19年度私立学校振興・共済事業団「学術研究振興資金」助成研究報告書』、尚美学園大学 白石隆生、52～58項。2008年。

- 3) McCorkle, Margit L., Johannes Brahms Thematisch-bibliographisches Werkverzeichnis, G.Henle Verlag München, XXX ~ XXXI, 1984
- 4) CD “BRAHMS Four Hand Piano Music Vol.1 ~ 17” Piano: Silke-Thora Matthies, Christian Köhn, NAXOS
- 5) McCorkle, Margit L., Johannes Brahms Thematisch-bibliographisches Werkverzeichnis, G.Henle Verlag München, XXX, 1984
- 6) 独和大辞典、小学館、1985年
- 7) Kalbeck, Max, Johannes Brahms Briefe an Fritz Simrock, Zweiter Band, (Brahms-Briefwechsel, Band 10), Hans Schneider, 187, 1974
- 8) McCorkle, Margit L., Johannes Brahms Thematisch-bibliographisches Werkverzeichnis, G.Henle Verlag München, 1984
- 9) Gurlitt, Wilibald, Riemann Musik Lexikon Personenteil, B.Schott’s Söhne Mainz, 1959

Slonimsky, Nicolas, Baker’s Biographical Dictionary of Musicians, Sixth Edition, Schirmer books, 1978

Sadie, Stanley, The New Globe Dictionary of Music and Musicians, Macmillan Publishers London, 2001

標準音楽辞典、音楽之友社、1966年

Blume, Friedrich, Die Musik in Geschichte und Gegenwart : Allgemeine Enzyklopedie der Musik, zweite neubearbeitete Ausgabe herausgegeben von Ludwig Finscher, Bärenreiter Kassel, 2006

Heuberger, Richard/Fellinger Richard, 天崎浩二 編・訳/関根裕子 共訳、ブラームスは語る、音楽之友社、2004年

http://wikipedia.org/wiki/Albert_Parlow

http://wikipedia.org/wiki/August_Reinhard